

# 穀水（澗河）流域の標点遺跡と穀水古河道の遺構

塩 沢 裕 仁

## 前 言

河洛文化が展開された中原、とくにその中心である洛陽を語る際、真つ先に思い浮かぶ河川は洛水である。洛陽盆地にはこの洛水のほか、伊水という大河川もあり、本研究班は先年『水経注』洛水・伊水条の研究成果に係る『水経注疏訳註 洛水・伊水篇』を刊行した。然るに、洛陽を語る上に避けては通れない河川がもう一つ存在する。穀水である。『水経注』では巻を改めて一つの巻とし洛水・伊水以上にこれを詳述している。拙著『千年帝都洛陽』において砂礫の河床で相当の流量を有する洛水・伊水の利水には増水期など極めて危険性が伴う点を指摘したが、それ故にこそ、洛陽盆地第三の河川にして渇水もなく非砂礫河床をもつ穀水が漢魏洛陽城という巨大都市を維持する生命線と成り得たのである。

穀水は現在の澗河に相当する河川であるが、『水経注』に述べる河道は洛陽市街地西北部にある王城公園の北側で大

きく変移を起こしている。現在の澗河は、河南省西部の陝県觀音堂鎮の東側にある谷に源を有し、東流しつつ澠池県・義馬市・新安県を経て洛陽市に入り、洛陽市澗西区王城公園の西北から南に流れを変え、洛陽市澗西区興隆寨の東南で洛河（洛水現河道）に入る（写真⑦）。全長一〇四キロメートルの中河川で、流域面積は一四三〇平方キロメートル、河床は亜粘土質で、河道傾斜度は四・二‰、湾曲度一・四四‰、総落差四四〇メートルである。然るに『水経注』にみる穀水はというに、秦嶺東端の谷間を縫うように流れ比較的に深い河谷を形成していることから東周王城遺跡の直上にある王城公園の西北までは河道変移を起こしにくく、澗河とほぼ同一の河道をとるが、洛河北岸の平坦な段丘上に出る王城公園西北の五女冢付近で大きく河道変移を起こしている。穀水古河道は五女冢付近から隴海鐵路に沿って東に向かい、明清代の洛陽で隋唐洛陽城の宮殿区にあたる洛陽老城の東側で灋河を横切り、隋唐洛陽城外郭東北角を経て現在の中州渠に沿って東北に流れ、漢魏洛陽城遺跡を回流して、さらに東に延び偃師市市街地の東側で洛水（現伊洛河）に合流している。<sup>②</sup>したがって、王城公園の西北より現澗河と旧穀水とは河道が大きく異なるのである。

本論は『水経注疏』穀水条を釈読するための考古学的な資料を提供するという意味において、穀水流域ですでに考古調査が実施されている都城・集落遺跡について触れていくが、上述のごとく現澗河の河道と旧穀水の河道とが東周王城遺跡を分岐点にして全く異なることから、現澗河流域の遺跡、ならびに東周王城以東の穀水古河道遺構と関連都城遺跡という二つの内容構成を以て述べていくものとする。また、『水経注』穀水条を考えるとという意味において、旧穀水の河道を基準として遺跡の状況を述べることから、とくに現澗河の河道を指す場合を除き、敢えて澗河という呼

称ではなく穀水という旧称を用いることとした。なお、漢魏洛陽城まで穀水を導くための人工溝渠を陽渠と称するが、『水経注』では穀水という表現と混用しているので注意が必要である。

## 一 穀水（澗河）流域の標点遺跡

### 1 穀水源流域の状況

穀水の源流は陝県と澠池県との県境をなす馬頭山の麓の小さな河谷にあり、河谷の中央にある張村（陝県）の北側で山麓に発する二つの流れが一つになり張村の集落を南北に貫いている。その後東南流して三一〇国道、隴海鐵路と交差、七里村の西側で東に向きを変える（写真①）。ここからいきなり水量は増えるが、現在澗河と称するのもここからである。張村と七里村ではそれぞれ新石器時代の遺構が確認されている。張村遺跡は面積約二万平方メートル、文化層の厚さ一〜二メートル、龍山文化の遺存であるが春秋戦国期や漢代の遺存も確認されており、七里村遺跡は面積約一・二万平方メートル、文化層の厚さは約二メートル、龍山文化の遺存である<sup>③</sup>。七里村より東流する穀水は澠池県城関鎮の西側において、西北の谷からくる一支流と合流するが、この間、河谷の中には土橋村・呉瑤頭・南馬村・英豪・東曲・西河南といった新石器時代遺跡が断続的に存在する。一方、この溪谷の基幹集落である観音堂鎮の西側にある分水嶺上には車轍遺跡（唐代の古道遺構と考えられているが時代的にはさらに遡る可能性がある）がある。この遺構のある地点がまさに崤山山脈の分水嶺であり、轍の跡が見事に残っていることから、交通史を考える上でも極めて有意義な遺

跡である<sup>(4)</sup>（写真<sup>(2)</sup>）。

滎池県城で合流する支流の源流は張村鎮（滎池県）の西側にある黒虎廟山の麓からのびる河谷にあり、この河谷でもすでに発掘調査が行われた丁村（仰韶期）のほか寨溝（仰韶・龍山期）・荊村（仰韶早期）などの新石器時代遺跡が数多く確認されている。また、戦国晩期とされる集落遺跡が朱城村（滎池県）で確認されている（朱城村遺跡）。村の東側に東西二城があったとされ、村落の東北にある高台の地面上で土器片が散見されるが、城壁などの遺構は目視できない。村落内に俱利城の石碑が立ち、秦趙会盟のときの遺構であると記されている。これに関連するものとして、その支流と穀水の合流点にあたる滎池県城南側の穀水の北岸には、秦趙の会盟台遺跡がある。形状は円錐台形で高さ約一メートル、底辺の周長は九メートルである。これまで軍関係の施設の中にあつたため、見学も不可能であつたが、現在では遺構の周囲のみが公園として開放されている。ただし、当該遺構に対して考古学的な調査が行われたか否かは判断としない。

## 2 仰韶（村）遺跡

上述のごとく穀水上流の河谷には数多くの新石器時代遺跡が確認されているが、特記すべきは滎池県城の北側に位置する新石器時代（晩期）の文化類型の指標となる仰韶遺跡である。仰韶遺跡は一九二〇年に中国地質調査所が行った豫西調査の際に発見されたもので、一九二一年にアンダーソンが発掘して以来、中国史を語る上で最も重要な文化史蹟となってきた。この場では仰韶文化について詳述する紙幅はないため、遺跡の現状を記すに止めるが、仰韶という

歴史的な遺跡がまさにこの穀水水系に立地することを改めて認識してもらえれば幸甚である。

仰韶遺跡は澠池県城の北、仰韶郷仰韶村と寺溝村の間の台地上にあり、飲牛河がその東側を南北に流れ澠池県城の東側を経て穀水に流れ込む。当該遺跡は一九五一年（第二回）、一九八〇・八一年（第三回）にも発掘調査が行われており、村落内の発掘地点にはそれぞれ石碑が建てられている。文化層は当初三層に分けられていたが、現在では①仰韶文化中期（廟底溝類型）、②仰韶文化晚期、③竜山文化早期（廟底溝二期文化）、④竜山文化晚期（河南竜山文化）の四層に分けられており、この四層については、寺溝村の北側にある遺構保存建築物の中で確認することができる。この建築物とは別に仰韶村の南側には博物館が建てられている。

### 3 馮異城

仰韶遺跡の西北、澠池県仰韶郷礼莊寨村西側の台地上に建てられており、城壁は東側の小溪に向かって「ㄣ」字型に開いている（写真③）。城址を囲む小溪との比高は六〇メートルに達し、鳥状の台地は天然の要害となっている。後漢初、赤眉軍に対抗するために馮異（『後漢書』卷一七馮異伝）が築造したとされ、東城壁を築造する前に赤眉軍が敗退したため東城壁は築造されなかったといわれる。南北西三面の城壁の残存状況は極めてよく、北城壁三九メートル、西城壁一九メートル、南城壁三四メートル、残高は最も高いところで二〇メートルに達する。夯築層の厚さは一〇〜一五センチメートル、夯窩の直径は四〜六センチメートル、土質は極めて粗い<sup>⑥</sup>。土質が緊密で極めて整然とした厚さ（七〜八センチメートル）を有する漢代の一般的夯築層の状況と比べると、漢代の遺構としては特異な構造を持っている。

るといふべきであり、応急的な構造物であると考えるべきであろう。その意味で赤眉期の築造物という認識に立つならば、極めて珍奇な城址であり、歴史的に注目すべき遺跡といわなければならない。地表には漢代のものと考えられる陶器片が散在しているが、数量的には多いとはいえない。

#### 4 楚坑

上述の秦趙会盟台遺跡から一〇キロメートルほど東に行った、義馬市千秋郷二十里鋪村の西側、穀水北岸の段丘上にある遺跡で、秦末に項羽が秦兵二〇万人を埋殺した場所とされる。楚坑遺跡と称されており、遺構については隴海鐵路の路線下より南側の穀水北岸の段丘上で多数の人骨が発掘されている。遺跡の面積は一万五千平方メートルと報告されているが、一部が発掘されたにすぎない。穀水の河谷とはいへ膨大な人数の埋殺が可能な黄土地域特有の開析谷のような地形ではなく、河岸段丘としても特段目立った地形ではない。何故に当該地が選択されたのか、その立地については今後の研究に期するものである。

#### 5 秦漢新安県古城

秦漢代の新安県古城は義馬市千秋郷石河村、楚坑遺跡のすぐ東側で、穀水の北岸の段丘上にある、面積一五万平方メートルを有する東西に長い長方形の城址である。<sup>(7)</sup> 現在の新安県城は当該遺跡の東約二二キロメートルの地点に位置している。漢代の県城の多くが河川の合流点に設けられているが、新安県もその範疇にあり、遺跡の東側を南北に流れる石河と穀水との合流点にある。地上面では城壁の遺構は全く確認できないが、かつて城内からは大型の陶水管が

出土しており、城内には漢代の遺物と考えられる瓦や陶器の破片が広く散在している。筆者の調査時にも石河村の集落内で大型の空心磚を確認している。現在遺構上に石河村の集落があることから、遺構の状況を把握することは難しいが、遺物は河川の合流点に近い集落東南部の農地で確認することができる。

## 6 鴻慶寺石窟

三一〇国道は義馬市千秋郷の集落がある台地上を走っているが、これと並行して穀水はその台地の下を東流する。隴海鉄路も穀水の北岸を走っており、常村郷では国道と穀水が東西に延びる岩盤の低丘陵（比高約三〇メートル）を挟む形になる。この丘陵を黄沙石山と称すが、その南麓、穀水北岸に開削されているのが鴻慶寺石窟である。元来六窟であったといわれるが現存しているのは四窟である。石質が悪く風化が進んでいるため、長期にわたって修復作業が行われている。四六の仏龕、一二体の仏像が確認されており、北魏期のものと唐代のものに分かれる。第一窟の保存は比較的によく、北魏期にみられる中心柱の形式を有し、壁面には釈迦修行図や降魔変が彫られている<sup>(4)</sup>。

## 7 鉄門千唐志齋

鴻慶寺石窟の東側、北澗河（広陽川水か）との合流点にあたる新安县鉄門鎮には千唐志齋（博物館）がある。鉄門の古称は闕門である。遺跡ではないが、石刻研究者には必見の資料館であることから、敢えてこの場で言及しておきたい。千唐志齋は旧国民党の将領張鈺によって造営されたもので、園林「藝廬」の一部を利用し、張鈺が収集した石刻（墓誌中心）を中心に陳列している。千唐志齋は一九四七年に政府の管轄となり、一九八五年に千唐志齋管理所が設置され、

千唐志齋博物館として公開されるにいたった。

園林西側の専用展示室では、西晋より北魏・隋・唐・五代・宋・明・清・民国に至る一四〇〇余枚（内、一二〇〇余枚が唐代、九〇余枚が宋代、三〇余枚が明代）の墓誌がその建物の壁面全体に埋め込まれており、収蔵庫内にも未整理の七〇〇余点が保管されているという。さらに、敷地の東側には小浪底ダムの建設によって水没することになった西沃石窟（北魏期、黄河南岸青要山北壁・新安県西沃郷西沃村）の石仏・石彫（龕二、石塔四）が移築展示されている。

## 8 函谷関

函谷関と称する施設については歴史上四つの施設を考えることができる。靈宝王塚村遺跡、新安城関鎮遺跡、靈宝孟村遺跡、潼関港口鎮遺跡である。このうち穀水に係る遺構が新安城関鎮遺跡である。よって本稿では新安城関鎮の函谷関について簡述するが、他の函谷関遺跡の詳細については拙稿「函谷関遺跡考証——四つの函谷関遺跡について——」ならびに「城壁・烽火台遺構よりみた潼関城址」を参照されたい。<sup>9)</sup>

新安函谷関については、世界文化遺産への登録にともない、二〇一二年六月から二〇一三年五月にかけて発掘調査が行われている<sup>10)</sup>。関城は、それぞれ異なった時期に造営された大城と小城とが連結した小型の城邑である。小城の平面は長方形を呈し、古道がその中央を貫通している。大城の東城壁は北側の鳳凰山上と南側の青龍山上にある長城壁と連結している。これは前漢の関城建設時の配置構造であり、後漢代には大城の南城壁が増築されたことから、関城の南側に南城壁と東城壁とで構成される比較的大きな空間（居住区域）が存在する。隋唐期の増改築の痕跡は明瞭では



なく、明清期以降の修築は関楼に集中している。現存する「H」字型の構造を有するに至ったのは、近代における民居の建設によって遺跡中央部の形状が断続的に破壊された結果である。

なお、東城壁下で確認された戦国期の道路遺構（写真④）を東側に延長すると、澗河の北岸で二〇一年の調査中に発見された岩盤上に残る軌轍痕に繋がる（二〇一三年一月一日付「大河報」洛陽：残存長四〇メートル、左右の車轍の幅一・二五メートル、軌轍の深さ二・五センチメートル）。この遺構については唐代の軌轍と説明されているが、東城壁下の遺構との接続関係ならびに周囲の環境から判断するに、東周期あるいはそれ以前から使われてきたものであると考えべきである。考古調査によって明らかとなった東城壁下の道路遺構は、当地が東周期から軍事交通の要地として活用されていたことを示している。前漢代に関城を築く環境がすでに東周代に完備されていたといえよう。

また、考古隊は黃河南岸の倉儲遺跡から南へ延び、澗河の新安函谷関遺跡を越えてさらに南進し、磁河（磁澗河、旧河川名の特定は難しい、後述）の河谷を回って南に洛河と郭坪河（恵水）合流点に位置する都尉治の遺構まで散関障の長城線を引いているが、そのラインは筆者が想定する散関障（黃河南岸 穀水河谷—洛水河谷—甘水上流）に極めて近い<sup>⑪</sup>。漢代の函谷関をより重要なものとする存在として、筆者が以前よりその存在を強調してきた散関障との繋がりが確認されたことも考古成果の一つといえる。ただし、磁河の河谷を内に包むものかどうか、甘水（現甘河）の河谷をどのように取り込んでいるかなど、散関障長城線の設置環境についてはなお課題を残している。甘水の水源には石城（『水経注疏』注 洛水・伊水篇）参照）が造られている（写真⑫）。

## 9 王湾遺跡と金水河

穀水は函谷関を経たのち、蛇行を繰り返しながら磁澗鎮にいたる。ここで西南から流れてくる磁河と合流する。磁河流域にも閭湾南遺跡などの新石器時代の遺跡が確認されている。磁澗鎮は李世民が討洛の際駐軍したこと知られる。穀水はその後さらに蛇行を繰り返しながら新安県と洛陽市との境界に至り、南からは王祥河、北からは金水河が合流する。三川が合流する地点、穀水が南から北へそして南へと大きく蛇行する流路の南岸段丘上（洛陽市澗西区王湾村北側）に王湾遺跡はあり、対岸には新石器竜山期の史家湾遺跡が、南側には商代の尚凹遺跡が位置している。面積は約四・五万平方メートル、遺物の包含する文化層の厚さは三メートル前後に達する。一九五九年から六〇年にかけて、北京大学により二回にわたる発掘調査が行われ、住居址が九基、灰坑が一七九穴、墓葬が一一九基発見されている。この新石器文化層は三期に分けられ、第一期の仰韶文化遺跡、第三期の竜山文化遺跡、二者の過渡期にあたる第二期文化遺跡が認識されており、洛陽地域の新石器文化の指標遺跡となっている。その明確な地層関係と資料の豊富さゆえに、王湾遺跡は仰韶文化から河南竜山文化への過渡期の性格を究明する上で、極めて重要な価値を有している<sup>(13)</sup>。

金水河（河南省新安県正村の西南と孟津県常袋郷の西の二つの水源を有する、全長二五キロメートル、非増水期でも断流は見られない）については当該区域に係る『水経注』の記載がない。金水河は澗河水系において澗河に次ぐ規模を有する河川である。それにも関わらず何故に記載がないのか。その錯簡（穀水条に記載される金谷水に比定）の可能性については拙稿「漢魏洛陽城穀水水文考」を参照されたい<sup>(14)</sup>。

王祥河（河南省新安县石人注が水源、全長一〇キロメートル）については、孝水とする見方もある。その一方で上述の磁河に係る記載が『水経注』にみられないことから、磁河を孝水に比定する見方もある。隋唐洛陽城の西苑の範囲を考える上にも孝水の比定については議論が求められるところである。

#### 10 谷水墓群

王湾遺跡から東に蛇行しながら流れる穀水の南岸の台地上（洛陽市澗西区谷水鎮）は魏晉から唐代（礦山廠唐墓群とも称す）にかけての墓葬区域になっている。当地には現在中信重型機械公司や中国一拖集团公司などの大規模な機械工場が建てられているが、その構内で多くの墓葬が確認されている。特記すべきは一九五六年に建設路と衡山路の交差点にある中信重型機械公司（旧礦山機器廠）の構内で発見された曹魏正始八年墓である。帷帳架の上に正始八年（二四七）八月の記名があったことから年代が明確になったもので、方形（東西三・三八メートル、南北三・二五メートル）で南北に耳室を持つ前室と長方形（東西三・二メートル、南北一・九五メートル）の後室で構成される磚室墓であり、注目すべき遺物として白黄色の玉杯が出土している。現在その墓葬全体が古代芸術館（旧古墓博物館）に移築、保存展示されている。<sup>15)</sup>

#### 11 北魏帝陵区

谷水墓群の対岸、穀水北岸にあたる柿園の丘陵（洛陽市西工区紅山郷）は邙山の丘陵区域につながっており、柿園の東端には北魏孝荘帝の静陵が所在する。そこから北側に宣武帝の景陵、孝文帝の長陵の順で四キロメートルほどの間隔をあけて北魏帝陵が並んでいる。

静陵（残高一五メートル、直径約四〇メートル）は三一〇国道のすぐ南側にあり、南に穀水を望む。ここからは巨大な石翁仲（高さ三・一四メートル）が出土している。邙山渠が墳丘の南側を通過しており、以前は周囲一面畑であったが、近年当区域は洛陽工業園区として開発が進み、周囲には工場が建ちはじめて大規模な工場地帯となっている。

景陵（古代芸術博物館敷地内、残高約一八メートル、周長三一四メートル）は洛陽市と孟津県との境界にあたる冢頭村にある。当該区域は「頭」という呼称からも理解されるように丘陵の尾根の部分に立地しているのである。近傍の村落では北魏期の墓誌が出土しており、その多くに埋葬地として「金谷原」の名称が見られる。先述の金谷水の比定問題と合わせて考えるべき問題である。

景陵の北に位置する長陵（残高約一四メートル、周長三五〇メートル）の一带は漚水（現漚河）の水源区域である。景陵と長陵の間から流れ出る一支流と、長陵の北から流れ出て東南流するもう一つの支流とは、孟津県朝陽郷の西で合流している。その後、漚水は南流して後述する西周青銅器遺構の東南で邙山の麓を抜けるが、その地点で西から流れてくる穀水と合流することになる。

なお、二〇一二年衡山路の延長工事の際、紅山郷の張嶺村（静陵の西北二キロメートル）で甲字形をした典型的な北魏期の大型墓葬が発掘された。全長五八・九メートル、深さ八・一メートル、墓道の長さ三九・七メートル、幅二・九メートル、墓室はほぼ方形で一〇・六メートル×一〇・八メートルという規模を持つ。出土遺物などから北魏末期と考えられており、節閔帝（前廢帝）の陵墓に比定されている。<sup>16</sup>このほか、邙山孟津県后溝村にある大墓については、漢靈帝陵

の可能性を視野に入れつつ高さと幅の比率から見て近隣の後漢の大墓とは形状が若干異なる点に疑念を有していたが、最近では周壕を有することが調査により判明し、その形状が長陵と基本的に同じであることから当該大墓は孝明帝の定陵に比定されている（洛陽古代芸術館資料）。以前はその南側にある中規模の墳丘が定陵と考えられていた。

## 二 穀水古河道の遺構

洛陽盆地に展開する五大都城のうち、東周王城、漢魏洛陽城、隋唐洛陽城の三都城遺跡はその存立環境において穀水古河道が不可避な存在であり、その意味でも穀水古河道の復元は洛陽都城史を探究する上に欠くべからざる問題として認識しなければならない。

以下、近年継続的に展開されている穀水古河道遺構の考古学調査の状況を軸に各都城遺跡の調査近況について述べていくが、前稿「洛河（洛水・伊河（伊水）とその流域の都城・集落遺跡」（『水経注疏訳注 洛水・伊水篇』）において都城遺跡の概況に言及していることから、その点についてはここでは割愛する。

### 1 東周王城と穀水古道遺跡

近年著しく市街地の開発が進む中で、東周王城遺跡の北側を流れる穀水古河道の状況、遺跡の西南区域に展開する宮殿区の状況、そして東部に分布する墓葬区の状況がより明らかになってきた。

穀水古河道の流路については、王城大道建設に伴う考古探査、ならびに隴海鐵路沿いの開発に伴う発掘調査におい

て、かなりの部分が明らかになっている。主な探査地点とその河道遺構としての淤土層（河床に堆積した泥砂）の堆積状況は次のとおりである。<sup>(17)</sup>

①西工区の紗廠西路と王城大道の交差点東北区域内：幅（南北）約一〇〇メートルの淤土層。

②西工区の道南路南側の中儲八〇一倉庫内：幅（南北）約一〇〇メートルの淤土層。

③老城区環城北路の九龍台における幅（南北）八〇メートルの淤土層。

宮殿区の状況については、瞿家屯ではすでにボーリング調査により二組の大きな面積をもつ夯土建築遺構が確認されており、そのうち北側の建築は周囲が垣壁で囲まれており、長方形（東西三四メートル、南北一八二メートル）の形状を有している。その東部では長さ約九〇メートル、幅約二〇メートルの南北に走る大道が検出されている。また瞿家屯の現澗河より東に二五〇メートル、漢代河南県城南城壁遺構より南に一五〇メートルの地点では、東西五五メートル、南北三〇メートル、厚さ一・五～二・三メートルの長方形大型建築遺跡が確認されている。遺構上面に直径〇・三〇メートル、深さ〇・三五メートルと直径〇・二〇メートル、深さ〇・三〇メートルの大小二種類の柱洞痕があること、ならびにその北側二五メートルにある垣壁（残長東西数百メートル、基槽幅三・五〇メートル）、垣壁と平行する深さ約七メートルの城壕、垣壁南側の排水管（残長約一〇メートル）など数多の遺構が発見されていることから、この遺構は早晚二期の異なる宮殿遺構であると考えられている。<sup>(18)</sup> この内容を補填する意味において、新たに提示された研究図をここに紹介しておきたい（図一）<sup>(19)</sup>。この図面をみるに、この宮殿区は北側に環壕を有し、東側では古河道に接し、西側では古



戦国晩期の赧王の居所（後述の韓旗遺跡より一時的に遷都）、あるいは西周君の宮殿区（戦国中期、孝王がその弟を報じた西周公国）ではないかと考えられている<sup>(41)</sup>。

なお、東周王城の城壁および王城の都城としての性格について、近年の発掘成果から注目すべき点が指摘されている。城址東側の墓葬区（現市街地の王城広場・西工体育場周辺の区域にあたる）を東城壁が分断しているというもので、東城壁が春秋中期頃に築造され、戦国より秦漢に改築が加えられたものとする<sup>(42)</sup>と、築造当初の西周期および東周遷都時に東周王城は外郭にあたる城壁を有していなかったことになる。上述の三角地帯の性格と合わせ今後議論すべき問題である。

前稿「洛河（洛水）・伊河（伊水）とその流域の都城・集落遺跡」の中で言及したので割愛するが、東周王城遺跡の内側には漢代の河南県城遺跡も存在することを付記しておく。

## 2 隋唐洛陽城北城と穀水古道遺跡

二〇〇四年に行われた洛陽市街地唐宮路北側の王城東城壁発掘調査によって、城壁の両側で時期の異なる水溝の遺構が確認されている<sup>(43)</sup>。このうち西側の水溝遺構（数十メートルの幅を有する可能性あり）は、宋代層位の下で戦国中晩期の護岸層の外側にあり、その淤土層からは小型の淡水巻貝が検出されている。このことから、遺構は明らかに河道痕であり、その水溝は修築を重ねながら唐代まで活用されていたものと考えられている。また、二〇一〇年に行われた洛陽駅東バスターミナルの東南、光華路中央部西側の洛陽市蔬菜副食品有限公司敷地内の発掘調査でも全く同様な状



況が確認されている。<sup>(24)</sup> 両調査現場は南北の位置関係にあることから、隋唐洛陽城の西側にして東周王城の東部の区域における唐代以前の水環境と穀水古河道との関係を考えるための重要な資料となりうるものである。

また、老城（明清洛陽城）の北関にある含嘉倉城遺跡区域南部でも幅約一〇〇メートルの河道痕（河道内の推積約一二メートル）および河道痕の北側に弧を描くように張り出した地形を有する河岸埠頭址（細かく碎いた石で舗装された地面と護岸用欄干柱洞四基を検出、柱洞は一辺〇・二メートルの方形、深さ約〇・三メートル）が確認される。<sup>(25)</sup> この区域を含む老城北城壁の北側、環城北路沿いに社会科学学院考古隊は数か所で探查を実施しており、その外濠と環城北路が穀水古河道に沿って作られていると認識し、さらに古河道は九龍台西側の西開口街の低地を経てこの台地の縁を回り込むように外濠に沿って流れ、瀍水と合流していたと想定している（資料は未公開であるが担当者に確認済み）。

### 3 瀍水と千金塢および北窯鑄銅遺構

瀍河回族自治区北窯村の西南、隴海鉄路の北側では西周前期の大型青銅器工房の遺構が発見されている。面積約一〇万平方メートル、文化層の厚さは八メートルに達する。一九七四年に発掘が行われ、房址一基、窯穴（灰坑）、祭祀坑、墓葬などが確認され、銅器、陶器、石器、鉛器、骨器、玉石器のほか、陶範、熔炉の残骸が出土していることから、西周前期の青銅器を考える上に極めて重要な遺跡となっている。<sup>(26)</sup> 遺跡の北側で比較的広い河谷をもつ瀍水は、遺跡の東側では壺口のように細くなった谷に入る。谷の南側はラップ状に開いており、その開口部にあつて遺構から南に延びる高台には洛陽東駅が設けられている。この高台の洛陽東駅南側の区域は九龍台と称されるが、瀍水と穀水

の古河道を考える上に標点として認識すべき重要な地形である。遺跡のあるこの高台を北から東へ、そして南へと回り込むように流れる漚水は、邛山台地の南端にあたる高台の南側、すなわち九龍台から洛水北岸の平坦な河岸段丘上に出ることになる。

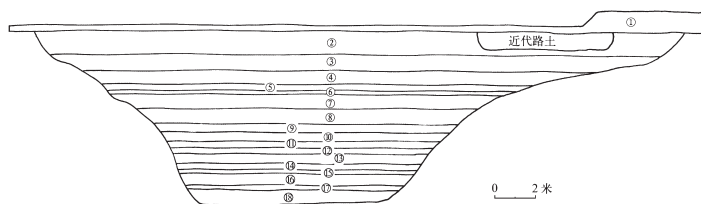
隋唐洛陽城北城の建設において穀水の河道に如何ほどの造成が加えられたかは判然としないが、上述のごとく隋建都以前の穀水は幅一〇〇メートルに達する河道をもち、現在の隴海鐵路沿いに東流していたことは明確である。然らば、邛山山中より南流してくる漚水とは、ここにおいて必然的に交差あるいは合流するという状況が生じる。

漚水は孟津県横水郷会漚溝に源を有する全長三五キロメートルの河川で、河床は粘土および重粘土質、非増水期には涸れて断流する季節性の強い極めて厄介な河川である。穀水がこのような性質をもつ漚水と合流するという状況からして、漚水を越えてさらに穀水が東流するためには、それに係る水利施設として相当に大掛かりなものが必要となる。『水経注』卷一五漚水条にみる千金堰とは穀水の跨漚問題克服のために漚水（あるいは合流後の漚穀水）に築かれた堰堤であるとみて間違いあるまい。

なお、九龍台より下流は比較的平坦な地形となるため、漚水は数多河道変移を起こしていると考えられる。

#### 4 漢魏洛陽城以西の穀水古河道および張分溝の遺構

漚水以東と張分溝遺跡以西の区間における古河道については、近年新たな調査が行われ、河道遺構が検出された。調査における探査坑の報告地点は、董村付近と唐寺関村西側の二か所である。<sup>(27)</sup> 董村では長さ約九〇〇メートルの西南



図二 董村付近古河道探査坑断面セクション図\*\*

から東北に延びる遺構（地表面から深さ二・八～三・六メートル）が検出されており、遺構開口部の幅は二九・二メートルで、深さ七・六～八・五メートルにある。唐寺関西では長さ一一・七メートルの西南から東北に延びる遺構が検出されており、遺構開口部の幅は三二・八メートル、深さ約八・八メートルにある。遺構底部の幅は九・五メートル、淤土の堆積層の厚さは五・六メートルである。なお、この部分の探査坑（水泥路の西側、焦枝鉄路の東約五五メートルの地点）断面のセクション図面（図二）は公開されており、それを見るに逆台形に近い形状（急傾斜の側面と平坦な底面）を有していることから当該区域の穀水古河道は人工河道（渠道）と考えるべきであろう。

孟津県象莊村以東についてもすでに穀水古河道の遺構が調査報告されている。その遺構は象莊村の西南西にある西外郭遺跡において張分溝を含めて三支に分流する。北側の河道遺構は残長三八〇メートル・幅一〇～一五メートル・淤土層の厚さ二～二・五メートル、南側の河道遺構は残長三五〇メートル・幅二〇～三〇メートル・淤土層の厚さ三～四メートルである。淤土の堆積状況から南道の出現は北道よりも遅いものの、その使用期間は比較的長期に及んだものと考えられている<sup>(28)</sup>。

張分溝は漢魏洛陽城西外郭の西側をこの郭壁に沿って流れている（写真⑥）。調査報

穀水（澗河）

流域の標点遺跡と穀水古河道の遺構

塩沢

一三三

告では、大城（後述）の西南端から四番目の城門（考古隊番号Ⅳ号）から西に延びる大道（通称閭闔門大道）と西外郭との交差点（齊郭村と龍村の間）より南側で現洛河に至る間の約二八〇〇メートルを検出している。幅は一五〇メートル、北が狭く、南に下るほど広がっている。<sup>(29)</sup>筆者も分金溝村西側にある南北に長い低地において、二〇〇五年一月に行われた三一〇国道脇の下水管敷設工事の際、張分溝の遺構と考えられる淤土の堆積層を確認している。

##### 5 漢魏洛陽城大城（近年、周代の都城遺跡としては韓旗遺跡ともいう）と穀水古河道

大城（金墉城を含む）の城壁遺構の外側を還流する古河道（護城河、外濠）の痕跡については、七三年、九三年の調査報告、および九九年の金墉城周辺の調査報告で詳細な情報が提示されている。<sup>(30)</sup>

調査報告によると、穀水の河道が護城河に流れ込むのは翟泉村の東北にある村寨牆の内側であるとされる。当地では西側から流れ込む一条の比較的規模の大きな淤土の堆積溝が発見されており、この堆積溝の遺構は金墉城甲城の西南部で三支に分かれている。金墉城の遺構は南北一〇四八メートル、東西二五〇メートル、甲・乙・丙城の三城から成るが、丙城東北部にある阿斗墳（蜀後主劉禪の陵墓）の調査でこの遺構が墳丘ではなく金墉城百尺樓の遺構とされ、最南端の丙城が魏の明帝期に造られ八王の乱の舞台となった所謂金墉城であると認識されるにいたった。一方、北方にある二つの城址（甲・乙城）については、北魏期の路面遺構の上面にあることより早くとも北魏末もしくは隋以降に築造された遺構とみられている（写真⑧）。

三支の内、第一支は南行する。乙城と丙城の西城壁の外側を城壁に沿って南へ向かい、（大城の）西城壁にある諸々

の城門の前を順次通過する。淤土層の厚さは三〇四メートルに達し、河幅は北側より一八、二二、二四、二八メートルと南に向かうほど広くなっている。河道と大城の西城壁とは一定の間隔を保っている。近年、北魏西明門遺跡北門道の下で、残長二〇メートル、磚積みの基槽（幅一・七メートル、磚槽内の幅〇・六メートル、深さ〇・九メートル）を持つ城内からの排水渠（東高西低、高低差〇・一メートル）の遺構が確認されている（写真<sup>⑩</sup>）。

第二支は東行する。乙城の北部を東西に貫通し、その後折れ曲がって東南に向かい、金村の西部、北魏大夏門のところで大城に入る。引水渠の遺構は確認されているが、大城内部での流路は未調査である。丙城が魏晋の金墉城と認識されることから、金墉城の北を東流する（『水経注』、『洛陽伽藍記』）という陽渠はこの河道遺構を指すものと考えてよからう。

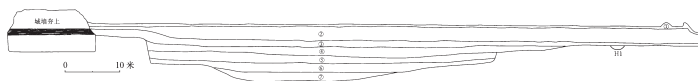
第三支は北行する。甲城の西城壁の外側を通過し、甲城を環流して翟泉村の東側で東に折れ、第二支と平行して東に向かう。両者が何処で合流するかは明らかではない。第三支の開鑿については甲城の築造と同一時期と考えられている。

甲城より東に約三〇〇メートル行つた中州渠の南側（金村の北）で第二支に繋がる河道の遺構が再び現れ、東に向かい大城の東北の角に至る（七三年の報告では当該遺構を第三支と結びつけて表記したが、九九年の報告ではこれを改め描出した河道痕を消去している。第三支は開鑿時期が下ることから、当該河道痕は第二支に充てて考えるべきである）。河道遺構は大城北城壁と平行しており、その間隔は二〇〇三五メートル、古河道遺構の幅は二〇〇二四メートル、淤土層の厚さは四メー

トルを超える。さらに河道の遺構は南に折れ曲がり、東城壁に沿って南に向かう。東城壁の屈折部にある北魏建春門遺跡北門洞の車道路土下では幅一・八メートルの磚築溝道（暗渠）が検出されているが、溝内の堆積状況から北魏以前に破棄されていたと考えられている<sup>(32)</sup>。

大城の東南にある辟雍遺跡（遺構全体は一辺約一七〇メートルの正方形）の北・東・西の三面では水道（環水溝）遺構が確認されている<sup>(33)</sup>。調査報告によると水道は、洛河南岸の築堤より一八〇メートル・幅四・五メートルで直線的に南下し、大型方形基壇の北一五六メートルのところで東西に分かれる。西には一八〇メートル直行した後左に折れて再び南に向かう。南行する部分の残長は約四〇〇メートルである。東にも一八〇メートル直行した後右に折れて再び南行する。南行する部分の残長は約四六〇メートル（約一八〇メートル南行、屈折後約三〇メートル西行、屈折後約一五〇メートル南行）である。水道遺構の調査から理解するところでは、北側より水を取り入れ、東西に分流するかたちで建築物の周囲を環流させていたと思われる。

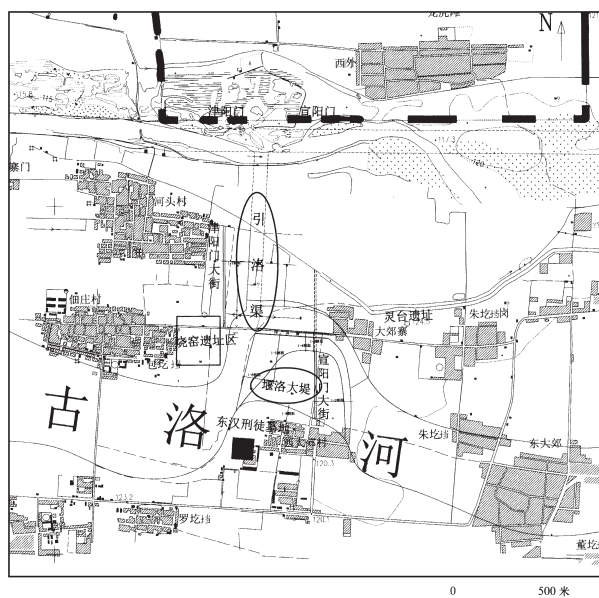
ところで、大城を環流する流れは何処に通じていたかというに、この状況において一つの問題が浮かび上がる。北魏建春門遺跡の外側（東側）で河道は東と南とに分流するのであり、西護城河から南護城河に回り込む流水は東護城河を南行する流水と大城の東南において衝突し捌け口を失い滞流を引き起こしてしまうことになる。辟雍還水溝の北部引水口はまさに大城の東南部に当たる。北側、すなわち護城河から引水し辟雍の周囲を環流させて洛水に排水するならば、上記の滞流問題は幾分解消される。しかし、大城から排出される大量の流水は幅五メートル程度の辟雍の環水



図三 寺碑村西探査坑断面セクション図\*\*

溝だけで処理できるものではない。大城の東南隅において、枝分かれしたもう一条の溝渠（河道）が存在して然るべきである。<sup>(34)</sup> 楊守敬『水経注図』『洛陽城図』では、東行する溝渠が描出されている。

昨今、東城壁の東側で現洛河北岸より北魏建春門大道遺構以南五〇メートルの地点に至る区間に調査区域が設定され（全長二四六〇メートル）、二か所に探査坑が設けられた。東城壁の外側（東側）にある護城河の状況を調査したものである。遺構上面開口部の幅は五九〇メートル、<sup>(35)</sup> 大城東城壁の立ち上がり部分から一・五〇メートル離れており、河岸の高さは西岸が東岸より二メートルほど高い。底部中央の深さは地表面から約五・二メートル（河床海拔一三三・六三八メートル〜一三三・六七メートルではほぼ平坦）、淤土の堆積層の厚さは二・三メートル〜四・六メートルである。寺碑村西探査坑のセクション図が図三である。寺碑村から現洛河までの区域はほぼ平坦であるが、寺碑村西から建春門のある韓旗屯村北までの区域は比高差が大きい。韓旗屯村に探査坑が設置されていないので、今一つ問題が解決されていない。東城壁沿いにある洛陽溝の遺構についても調査が行われ、堰堤の遺構（南岸が北岸より〇・八メートル高く、堆積中に殷代中晩期の遺物が混入）が検出されているが、当該調査はボーリングによる簡易的なものであるとのこと、後述する偃師考古隊による建春門外を東行する河道調査報告との整合性が明確ではない。洛陽溝は大城東部の



図四 堰洛大堤および引水渠遺跡平面図\*\*

標点となるべき重要な遺構であることから、今後詳細な調査が行われることを期待したい。

また、佃莊村と河頭村の東側、西大郊村の北側、大郊寨村の西側にして現洛河に至る東西一二〇〇メートル、南北一五〇〇メートルの区域で、洛水から城南護城河（陽渠、穀水古河道）に引水するための大規模な遺構が検出された。考古隊はそれぞれの遺構について引洛渠、堰洛大堤、排洪渠と称する（図四）。洛水古河道の河道痕はCORONA衛星画像でも確認できるほどの鮮明であり、西大郊村の小丘陵を巡るように流れている。この小丘陵の北面に堤防と排水道を作り、北に洛水の本流を流し、城南護城河に入れる大規模な構造物である。堰洛大堤の上部は後世（時期は不確定）の氾濫により大きく削られており、大郊寨村西南に設けられた南北一一六メートルの探查坑で確認された遺構は、



東西三〇〇～五五〇メートル（底部最長約六〇〇メートル）、南北四〇三メートル（河岸より排洪渠まで）、北魏以前の地層（地表面から二・五メートル）から下で検出されており、卵石を混入した夯築である。<sup>37)</sup> 排洪渠の遺構は地表面から四・七～五・三メートルの位置で検出され、幅は約三〇メートル、淤土の堆積は四つの層からなり、深さ八メートルに至っても底部は未検出である。河頭村の東に設けられた探查坑の図面は未公開のため引洛渠の詳細な状況は分からない（担当者によると探查はすべて発掘ではなくボーリング調査である）。宣陽門大道が大堤遺構の上にあると説明されることから宣陽門開辟以前の遺構であると考えるべきであるが、このような大規模な遺構が『水経注』の中で何故明瞭に読み取れないのか、考古隊は後漢の引洛渠を想定しているが、文献史料で如何なる施設に充てて考えるべきか、今後に期すべき重要な検討課題である。

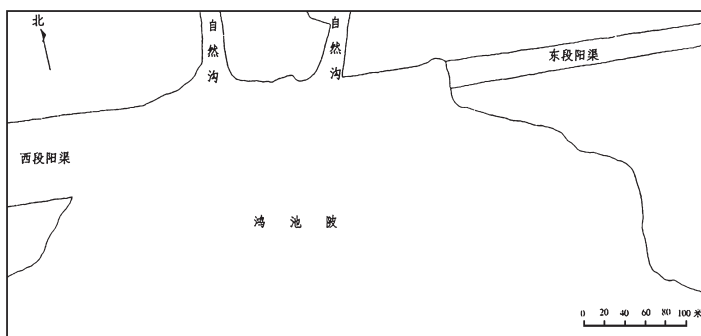
なお、大城の中心部にある太極殿遺跡とその周辺の調査は近年着々と進行している。膨大な調査量であり、本論でそれを詳述する紙幅はなく割愛せざるを得ないが、近数年の状況とその成果については、「漢魏洛陽城宮城太極殿宮院遺址発掘収獲」『中国重要考古発現二〇一七』（文物出版社、二〇一八年四月）を参照されたい。

#### 6 大城より東向する河道の遺構と関連遺跡

二〇一一年に公開された偃師考古隊による積年の調査では、<sup>38)</sup> ①東外郭より東に向かい偃師商城内を通過して鴻池陂に至る区間（東陽渠西区）、②鴻池陂遺跡、③鴻池陂より東に向かい偃師老城を経て洛河に注ぐ区間（渠道遺構は東屯村東山嘴の南まで。合流部付近の遺構は洛河の氾濫により消滅。東陽渠東区）の水系遺構が検出されている。

①韓旗屯村の東北（北魏建春門遺址の東）より東行し、白村の北・隴海鐵路の北約一〇〇メートルの地点（北魏東外郭）、華潤発電所の南（隴海鐵路と交差）、羊二莊村の西北（三一〇国道と交差）、南蔡莊村の北、大家頭村の北、前杜楼村の南を経て、偃師商城遺址の中央部を貫通し偃師実験中学の南に至る一二六〇〇メートルの河道遺構である。遺構は黄褐色土層（唐宋期以降）の下にある紅褐色土層（漢魏期）の中で確認されており、側壁は基本的に垂直である。遺構の幅は、漢魏洛陽城の東外郭から南蔡莊村までは六六〇七七メートル、南蔡莊村から前杜楼村までは七〇〇七五メートル、前杜楼村から偃師商城までは六八〇七五メートル、偃師商城から鴻池陂遺跡までは七六〇八〇メートル、遺構内の堆積は大家頭村の北側を境としてその東西で異なっている。この極めて幅の広い直線の河道遺構は大型船舶の航行を想起させるものであり、考古隊は大型の漕運水道として認識している。<sup>39)</sup> 晋の馬市（東市）や常満倉（常平倉）、北魏の太倉や租場といった市場や糧倉の立地環境を考えるための貴重な情報でもある。

②『水経注』穀水条引く『百官志』に洛陽の東二〇里にあると記される鴻池陂の遺構は、偃師商城遺跡の東南部で確認されている。東は高莊村の西約三〇〇メートルの地点、西は塔莊村の東で三一〇国道の東側、北は洛神路の南七〇メートル地点、南は洛河の改道により消滅している。淤土の堆積は五メートル以上、底部は未確認で、形状は東西約一四八〇メートル・南北約八〇〇メートルの不規則な楕円形を呈する。池辺はその殆どが緩傾斜をなしているが、西北の陽渠が流入するところでは垂直である。堆積の状況からみて東陽渠西区の渠道と鴻池陂とは同一時期のものと考えられている。また、鴻池陂遺跡の東側では池沼遺構（東西三〇〇メートル、南北一五〇メートル）がもう一つ確認され



図五 鴻池陂遺址および東陽渠西渠道と東渠道\*\*\*

ており、堆積状況は鴻池陂と若干異なっているものの時期を同じくする単一の池沼あるいは流水調整池と考えられている。

③鴻池陂よりさらに東に延びる河道痕としては、華夏世紀城（マンション街区）敷地内から、偃師老城区の北、山化郷湯泉村の東南（中州渠と合一）を経て、東屯村東山嘴の南に至る五八〇〇メートルが検出されている。鴻池陂址より偃師老城に至る区間の幅は二五〇三メートル、偃師老城から東屯村に至る区間の幅は幅三〇〇三メートルである。渠道の側壁は緩傾斜をなしている。遺構内底部に若干の淤土層が確認されるに止まることから流水の有無が問題とされ、その河幅からみても当該遺構が鴻池陂から洛水に出る穀水の主河道と考えることは難しい。

このほか、現洛河河道の北側を六三〇〇メートルにわたりボーリング調査した洛陽考古隊は偃師市首陽山鎮魚骨村と和村の南側で水池の遺構とその上層で三つの溝の遺構（溝一：上幅六メートル、底幅一・七メートル、堆積中に路土および車轍痕あり。溝二：上幅四六メートル、底幅四二・五メートル、堆積中に金元代の磁碗の残片を含む。溝三：上幅五メートル、底幅二・三メートル、

漢代の縄文瓦片を含む）を検出している。水池遺構は二つの段面を有し、上面の幅は三八・五メートル、下面は探查坑の外に通じており、その深さも七メートルを超えても底部は検出されていない。当該遺構の調査をはじめとする二〇一三年から二〇一四年にかけて行われた漕運水系調査は、二〇一三年に発掘された清代の沈船との関係において運河古河道遺構（先述の大城東南隅から東行する河道を想定している）を検出することを目的としてなされたものであるが、沈船と大運河を結びつけるというあまりにも結論ありきの調査である。沈船が確認された地層の図面からは漢唐の運河の痕跡を示す内容が読み取れないことから、直接担当者に内容を確認したところ、考古学的な根拠は何もなく、あくまでも推測であるという。考古隊の個々の調査は周密に行われているが、あまりに飛躍しすぎた結論が提示されているのは、学術調査としては粗笨であると言わざるをえない。

## 結 語

以上、第一部では東周王城以西の現澗河流域の遺跡について触れた。この区域では旧穀水は山間部を流れ、比較的に深い河谷を形成していることから河道変移の可能性が極めて低く、現澗河と旧穀水とはほぼ同一のものと考えてよい。第二部では東周王城以東の河道変移を起こした穀水の古河道の遺構を中心に言及した。穀水古河道は現在の洛陽市街地を通過し、偃師まで延びるもので、その遺構調査は開発にともなう緊急調査が主体となっているものの断続的に行われ、続々と発表される考古隊の調査報告から、かなりの部分における河道復元が可能となっている。そして、

穀水古河道を巡る問題は漢魏洛陽城に限らず、東周王城、隋唐洛陽城という巨大都城の生態復元にも係るものとして極めて重要な問題を包括しているのである。それ故に、今後さらに調査が進むことを期待するものであるが、調査区域が広大かつ複数の行政区域にまたがっていることから、それぞれの組織間の関係も複雑であり、報告の内容や結論にも往々にして齟齬がみられることも前提として認識しておかなければならず、報告書の活用には十分な注意をもつて臨むべきことを末筆ながら重ねて述べておきたい。

## 注

- (1) 拙著『千年帝都洛陽―その遺跡と人文・自然環境―』雄山閣、二〇一〇年。
- (2) 拙稿「漢魏洛陽城穀水水文考」『東洋史研究』七一卷二号、二〇一二年。
- (3) 国家文物局『中国文物地圖集』（河南分冊）、中国地圖出版社、一九九一年。
- (4) 洛陽市文物考古研究院、陝西嶠函古道文物保護管理所「陝西嶠函古道遺址考古調查与試掘的初步收穫」『洛陽考古』二〇一六年第一期。
- (5) 王巍『中国考古学大辞典』上海辞書出版社、二〇一四年。
- (6) 河南省文物局『河南省文物志』上、文物出版社、二〇〇九年。
- (7) 国家文物局『中国文物地圖集』（河南分冊）、前掲注（3）。

- (8) 陳平「鴻慶寺石窟」『中原文物』一九八七年第四期、李中翔「鴻慶寺石窟保護研究」『中原文物』二〇〇三年第一期、久野美樹「鴻慶寺石窟第一窟について」『法政史学』第八四号、二〇一五年。
- (9) 拙稿「函谷関遺跡考証―四つの函谷関遺跡について―」『東洋文化研究所紀要』第一六九冊、二〇一六年、「城壁・烽火台遺構よりみた潼関城址」国際シンポジウム「前近代中国における交通路と関津に関する環境史学的研究」報告書、二〇一七年。
- (10) 洛陽市文物考古研究院「新安函谷関遺址考古調査発掘獲得重大収獲」『中国文物報』二〇一三年一〇月二五日、洛陽市文物考古研究院・新安県文物管理局「河南新安漢函谷関遺址二〇一二―二〇一三年考古調査与発掘」『考古』二〇一四年第一期、洛陽市文物考古研究院「洛陽新安漢函谷関遺址考古工作総述」『洛陽考古』二〇一四年第二期。
- (11) 筆者が指摘した散関障の防衛線と関連する遺跡については、二〇〇八年に洛陽市ボーリング管理辦公室による鳳凰山、青龍山、窯場村への調査によって、新安関城遺跡の南北両方に連なる長城遺構が検出されている。「河南新安漢函谷関遺址二〇一二―二〇一三年考古調査与発掘」前掲注(10)。
- (12) 拙著『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣、二〇一三年。
- (13) 北京大学考古文博学院『洛陽王湾―田野考古発掘報告』北京大学出版社、二〇〇二年。
- (14) 拙稿「漢魏洛陽城穀水水文考」前掲注(2)。
- (15) 『考古通訊』一九五八年第七期、洛陽市文物工作隊「洛陽曹魏正始八年墓發掘報告」『考古』一九八九年第四期。
- (16) 「洛陽衡山路北魏大墓」『二〇一三年中国重要考古發現』文物出版社、二〇一四年。

(17) 王炬「谷水与洛陽諸城址的關係初探」『考古』二〇一一年第一〇期、洛陽市文物工作隊資料室收藏內部非公開資料、拙稿「漢魏洛陽城穀水水文考」前掲注(2)。

(18) 「洛陽東周王城内発現大型夯土基址」『中国文物報』一九九九年八月二九日。

(19) 徐昭峰「試論東周王城的城郭布局及其演變」『考古』二〇一一年第五期。

(20) 洛陽博物館「洛陽戰國糧倉試掘紀略」『文物』一九八一年第一期。

(21) 許宏「先秦城邑考古」金城出版社・西苑出版社、二〇一七年、第六章春秋戰國時代城邑。

(22) 許宏「先秦城邑考古」前掲注(21)。

(23) 鄭州大學歷史學院・洛陽市文物工作隊「洛陽東周王城東城牆遺址二〇〇四年度發掘簡報」『文物』二〇〇八年第八期。

(24) 洛陽市文物工作隊「考古年報」二〇一〇年。

(25) 河南省博物館・洛陽市博物館「洛陽隋唐含嘉倉的發掘」『文物』一九七二年第三期、洛陽文物工作隊「洛陽含嘉倉一九八八年發掘簡報」『文物』一九九二年第三期、方孝廉・謝虎君「洛陽含嘉倉的發掘与研究」『洛陽博物館建館五〇周年論文集』洛陽博物館、大象出版社、二〇〇八年。

(26) 洛陽市文物工作隊「一九七五—一九七九年洛陽北窯西周鑄銅遺址的發掘」『考古』一九八三年第五期。

(27) 洛陽市文物考古研究院「洛陽漢唐漕運水系考古調查」『洛陽考古』二〇一六年第四期。

(28) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城工作隊「北魏洛陽外郭城和水道的勘査」『考古』一九九三年第七期、杜金鵬・錢国祥

『漢魏洛陽城遺址研究』前言、科学出版社、二〇〇七年。

(29) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城工作队「北魏洛陽外郭城和水道的勘査」前掲注(28)。

(30) 中国科学院考古研究所洛陽工作队「漢魏洛陽城初步勘査」『考古』一九七三年第四期、中国科学院考古研究所洛陽漢魏故城工作队「北魏洛陽外郭城和水道的勘査」前掲注(28)、中国科学院考古研究所洛陽漢魏故城金墉城址發掘簡報『考古』一九九九年第三期。

(31) 「漢魏洛陽故城北魏内城西陽門遺址」『中国考古学年鑑』二〇一四『中国社会科学出版社、二〇一五年。

(32) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城工作队「漢魏洛陽城北魏建春門遺址的發掘」『考古』一九八八年第九期。

(33) 中国社会科学院考古研究所『漢魏洛陽故城南郊礼制建築遺址——一九六二—一九九二年考古發掘報告』文物出版社、二〇一〇年、第三章辟雍遺址。

(34) 拙稿「漢魏洛陽城穀水水文考」前掲注(2)。

(35) 洛陽市文物考古研究院「洛陽漢唐漕運水系考古調查」前掲注(27)。「洛陽運河一号・二号清代沈船遺址与漢唐漕運水系調查」『二〇一四年中国重要考古發現』文物出版社、二〇一五年、の中では六一・二メートルと記す。

(36) 「洛陽運河一号・二号清代沈船遺址与漢唐漕運水系調查」前掲注(35)。

(37) 洛陽市文物考古研究院「洛陽漢唐漕運水系考古調查」前掲注(27)。「洛陽運河一号・二号清代沈船遺址与漢唐漕運水系調查」前掲注(35)、の中では東西五三〇、南北四二〇メートルと記す。



(38) 偃師市文物管理局「漢魏洛陽城東陽渠・鴻池陂考古勘察簡報」『華夏考古』二〇一一年第一期、拙稿「漢魏洛陽城穀水水文考」前掲注(2)。

(39) 杜金鵬・錢国祥『漢魏洛陽城遺址研究』前言、前掲注(28)。

\* 図一は、徐昭峰「試論東周王城的城郭布局其演變」『考古』二〇一一年第五期より転載

\*\* 図二、三、四は洛陽市文物考古研究院「洛陽漢唐漕運水系考古調査」『洛陽考古』二〇一六年第四期より転載(図四は加筆してある)

\*\*\* 図五は、偃師市文物管理局「漢魏洛陽城東陽渠・鴻池陂考古勘察簡報」『華夏考古』二〇一一年第一期より転載